

国語学者・金田一秀穂さんが読む首相の「姑息な言葉」 すり替えと浅薄、政策にも

毎日新聞 2020年12月6日 08時00分(最終更新 12月6日 10時17分)



国語学者の金田一秀穂さん＝2019年8月4日、北田研索さん撮影

「総合的・俯瞰（ふかん）的」「多様性」「バランス」「既得権益」……。日本学術会議の任命拒否問題を巡っては、菅義偉首相が抽象的なフレーズを繰り返す場面が目立つ。具体性を著しく欠いた国のトップの説明は、日本語の専門家にはどう映っているのだろうか。国語学者の金田一秀穂さんは「★本来の意味での『姑息』（こそく）」と指摘し、政権が打ち出す★政策にも相通ずるものがあるとみる。【金志尚/統合デジタル取材センター】

「何も考えていないんだろうな、この人は」

——菅さんは抽象的な言葉が多い印象です。どう見えていますか。

◆あまり考えた発言とは思えないですね。その場その場をしのげればよいと思っているんでしょう。（学術会議について）「女性が少ない」とか「私立大所属が少ない」「既得権益」とか、思いついたことをとりあえず言っている感じですね。これらは★中身を伴わない、何の意味もない言葉です。「★何も考えていないんだろうな、この人は」と思えますね。ポリシーがあって言っているわけではないことが分かってしまう。

つまりは姑息なんです。姑息は「ひきょう」という元々なかった意味で使われることが多いですが、本来の意味は「★その場限り」。菅さんはその場限りの答弁を繰り返して当座をしのぎ、いずれ国民が飽きて聞く気がなくなるのを待っているんでしょう。

——その場限りの答弁でその場を収め、ほとぼりが冷めるのを待つわけですね。



菅義偉首相（左）と、ハリス上院議員 = AP

◆米国など民主主義的な国は普通、「政治は言葉」だと思っています。それこそ（米副大統領に就く予定の）ハリスさんの演説を聞くと、「政治家ってこういうものだよなあ」と思います。でも日本には残念ながらこういう人はいませんね。★菅さんたちは政治は人事で動くのであって、言葉だとは思っていない。

姑息さは政策にも表れています。「やっている感」と言うんですかね。要するに何かやらないといけないというのが先立っている。その最たるものが「GoTo トラベル」ではないでしょうか。あらかじめ先の見通しを立てていないから、ちぐはぐで、その場しのぎの対応を繰り返している。周りに頭のいい官僚がいるはずなのに、どうしてこうなるんでしょう。姑息と言えば、安倍晋三政権時に行われた一斉休校もそうでしたけどね。

「任命」を「人事」にすり替えている

——国会では「答弁を差し控える」と答える場面も続出しました。

◆言葉を微妙に変えているのも気になりますね。学術会議を巡って「人事のことなので申し上げられない」という発言をよく聞きますが、★人事じゃないだろうと僕は思う。例えば総理大臣が麻生太郎さんを財務大臣に就かせます。これは人事ですかね？ 任命ですよ。確かに「人事」と言われると、言っただけいけないことのような気がしてくるんです。会社でも個人に関わる人事の話になると、明らかにできない部分があるかもしれませ

ん。でも、権力者がその権力を行使する任命は、おのずから意味するところが人事とは異なります。言葉をすり替えて、いかにも言うてはいけないことのように言っていると、僕には聞こえます。

「差し控える」、つまり「お答えしません」という答弁があまりに多いのは、これはもう言葉のやり取り、コミュニケーション以前の問題です。昔の政治家を振り返ると、質問の趣旨と違うことを答えることはありましたが、もうちょっと芸があった。「何か答えている」ようには見せていましたよね。今は★対話を完全に拒否しているといったら少し言い過ぎかもしれませんが、それに近いやり方なんです。

「分かるだろ？」 「うん」の空気



参院本会議で立憲民主党の古賀之士氏の質問に答える菅義偉首相＝国会

内で 2020 年 11 月 30 日午後 1 時 40 分、竹内幹撮影

「アカデミズムは政府が主導できる」と思われたらたまったものではない

――改めて、学術会議の任命拒否問題についてはどう考えていますか。

◆すぐに学問の自由を侵すことにはならないと思います。ただ、今回が最初の一步で、これから同じようなことが続いていくかもしれない。「★アカデミズムは政府が主導できる」なんて考えられたら、たまったものではない。その意味で、政府がアカデミズムに介入できてしまった今回の経験は非常に恐ろしい。将来的には国立大の教授人事とかにも関わってくるかもしれない。そうなったらもっと恐ろしいし、絶対にやめてほしい。

国家権力がアカデミズムや芸術といったものに触っちゃうと、★貧しい国になります。豊かさというのは、いろいろな考えがあって初めて成り立つものです。それは歴史的にも明らかです。だから★今回の任命拒否を認めてはなりません。

きんだいち・ひでほ

1953年東京生まれ。東京外国語大大学院修了。専門は国語学、日本語教育など。杏林大外国語学部教授。言語学者の家系に生まれ、祖父の金田一京助さんはアイヌ語研究、父の春彦さんは国語辞典編さんでそれぞれ知られる。著書に「金田一秀穂の心地よい日本語」「日本語のへそ」など。